

中部大学応用生物学部紀要と生物機能開発研究所紀要の合併について

中部大学生物機能開発研究所は2000年4月に開設された。その1つの目的は、バイオサイエンス・バイオテクノロジーを対象とした新たな教育研究組織である応用生物学部を立ち上げる母体となることである。新学部は2001年4月に開設され、以後、順調な発展をとげ、現在、応用生物化学科、環境生物科学科、食品栄養科学科の3学科で約1200名の学部学生が在籍している。2005年4月には大学院応用生物学研究科修士課程が開設され、2007年4月には博士後期課程が開設され、修士課程は博士前期課程となった。従って、来年度には博士後期課程が完成年度を迎え、学部—大学院の一環体制が出来上がることになっている。学部発足した当時と比べ、学部・大学院の教育研究力は飛躍的に増加している。研究所のもう一つの目的は、生物のもつ優れた機能を利用して人類のためになる開発研究を行うことであり、これまで明らかにされて来た機能、あるいは未知の新機能を巧みに応用する研究が展開されて来た。

さて、学部と研究所はこれまでに研究論文を刊行する目的で紀要をそれぞれ別個に出版してきた。ご承知のごとく、大学等が出版する紀要については、色々の議論がある。紀要の読者はあまりいないのではないかと、紀要の論文は研究業績として認められないことがあるなどである。大学紀要は出版にあたり、論文の査読が行われぬか、あるいは簡素な査読で済ます例が多く、論文がきっちりとした外部評価を受けていないという理由からである。このため、博士論文を構成する学術誌として難色を示されることがあり、また、研究成果を紀要に公表することをためらう研究者も多い。しかし、研究発表のための適当なジャーナルがない場合の研究成果の発表のために是非必要であるとする考えがある。文献検索をしていると、どうしても手に入れなければならない論文が、他大学の紀要にでていることもある。このような事情を考慮しつつ、学部教授会では学部紀要の見直しを行い、今年度から学部紀要を廃止して、その持っている機能を研究所紀要に移すことにした。2つの紀要の合併がスムーズに行われたのは、生物機能開発研究所のメンバーが学部教員で構成されていたからであり、特に異論はなかった。研究所紀要は昨年度から電子出版の形をとっており、出版経費の大幅な削減に成功したことになる。新しい紀要が、順調に発展することを期待している。

2008年3月

応用生物学部長 荒井基夫